

浄土

monthly
JODO

2013
December

12



2013
年『浄土』表紙の人

佐野芳朗



佐野 芳朗（さの よしろう）

走馬灯に手を翳しながら…

1939年愛知県は尾張瀬戸市、瀬戸焼の町に手打うどん屋の次男として生を受ける。瀬戸窯業の工芸を専攻、ノベリティーデザイナーに就く。

1962年上京、グラフィックデザインを学ぶ。

傍ら岡本太郎のアトリエで「かの子文学碑」ほかミニュメント製作に参加。

二科展デザイン賞、パフォーマンスとして「1000円作品展」活動 等。本邦初の「ボランティア」誌 40数年間製作。

全日本ろうあ連盟「絵で学ぶ手話」連作。

同時期、正力松太郎氏提唱の-全国青少年教化協議会-「おしえの泉」「ぴっばら」等の製作に協力。

最近は機関誌『浄土』にお招きをお受けております。
淀みの川を流れつ…

合掌

浄土

2013/12月号 目次

お浄土のはなし（後編）.....	ひろさちや	2
会いたい人 柳亭市馬さん（下）.....	関 容子	14
響流十方	小村正孝	24
連載小説 渡辺海旭	前田和男	28
江戸を歩く	森 清鑑	36
誌上句会	選者＝増田河郎子	44
マンガ さっちゃんはネッ	かまちよしろう	47
編集後記.....		48

表紙・表紙裏＝2013「浄土」表紙の人 佐野芳朗

背表紙裏＝泰雲の美味探訪



表紙題字＝中村康隆元浄土門主

アートディレクション＝近藤十四郎

協力＝迦陵頻伽舎

法然上人鑽仰会主催講演会 平成二十五年六月二十五日開催（於大本山増上寺慈雲閣）

お浄土の はなし

《後編》

ひろさちや

私が講師を務めた、あるときの仏教の講演会で、質疑応答の時間があり、司会の方が「何か質問がありますか」と言ったら、五十代くらい妙齢のご婦人が手を挙げられました。何ですかって期待してましたら、「先生、お浄土に行ったら生前親しかった人と再び会えるって教わったんですが、あれは本当の話ですか」って聞かれたんです。「この世の中で縁のあった人と再びお浄土で出会うことはできる。それは、お経の中に俱会一処という言葉があるとおり、再び一つのところで出会うんだ。だから、あなたも会うことができますよ」と教えてあげたのです。

そう答えると、その女性にはやりと笑って、まるで私にけんかを売りたいに、「そうですか、わかりました。それじゃあ、先生、私、死んでお浄土に行くのをやめにします。私は地獄に行きます」と言うのです。私は、地獄に行きたいと言われ、ピンときたもので、「ああ、そうですか。あなたは地獄に行きたいと言われ、ピンときたもので」と言ったら、人を軽蔑したような顔で、「先生本当にわかるんですか」って言うから、

「あなたの気持ちぐらいいすぐわかるよ。あなたね、お姑さんに会うのが嫌なんでしょう。いじめられたお姑さんにお浄土に行って再び会うのは嫌だ。だから、お姑さんのいない地獄に行くって言われる」と言ったら、「先生、図星です。よくわかりましたね」って言うのです。

「それぐらいいくわかりますよ。でも、あなたね、地獄に行きたいって言われるからちょっと教えておきますが、地獄に行けばお姑さんに会わずに済みますよ。でもね、あなた、地獄に行けばあなたのご主人とも会うことはできませんよ」って言ったら、

「主人とは会えないんですか。それは願ったり叶ったりです」と。

男性の皆さん、あきらめてください。女房は大概そう思っています。主人に会わないよ

うにする、願ったり叶ったりって嫌な顔をして言うんです。

でも、それぐらいの売られたけんかで負けはしません。

「そうですか。ご主人に会わないで、それでいいって言うんですか。それじゃあ、あなたね、ご自分を産んでくださったお父さん、お母さんにも会えませんか」って言ったら、

「えっ」って言うわけですね。

「あなた、ご自分のお子さんにも会えないんですよ。お友達にも会えないんですよ」って教えてあげた。そしたら、

「どうしてですか」って言って、そこでちょっと心配顔になった。

「あなたの行く地獄は孤独地獄なんだ。そこにはだれもない。そういう地獄にあなたは行くことになっているんだ」って言って教えてあげたんです。

孤独地獄はだれもないのです。でも、何か食べたいなと思えば、お腹がすいたなと思えば、ちゃんと目の前に食事が出てくる、ご馳走が出てくるわけです。まるで回転寿司みたいなものです。炊事も洗濯も何もしないでいい、空調も効いてる。そういうところなんです。

それから、「あなたをいじめる鬼もいませんよ。その地獄であなたは何年苦しむか知っていますか」って言ったら、

「知りません」と言う。

その辺のことは余り知らないと思いますが、私はちゃんと計算してある。孤独地獄を務める期間を計算したら、一兆六千二百億年です。

「だから、あなた、一兆六千二百億年、孤独地獄でじっと過ごさない。行きなさい、行きなさい」って言ったら半べそかいちゃって、

「先生、私をいじめないでください」って言う。

「私、何もあなたをいじめてませんよ。あなたが行きたいと行ったから、私は地獄の観光案内をしただけです」と言っただけです。

ともかく、彼女はこの世の中でいじめられたお姑さんに会いたくないという気持ちを持つているわけです。でも、このお姑さんに会いたくないというあなたのその気持ち、それが実は地獄なんだと教えたんです。

皆さん、地獄や極楽というと、死んでから行く世界のように思っておられます。これは確かに死んでから行く世界でもあります。しかし、同時に、今あなたの心の中にある世界でもあるのです。

あのいじめられたお姑さんに会ったたら地獄に行つたほうがましだと思ふ、その心が地獄なんです。

お姑さんのいらつしやる極楽に行つて、もう一度お詫びができる、お母さんとしみじみ話し合ふことができるという優しさの心が生じたとき、その人の心の中にお浄土があるんだと考えることができます。

禪宗に、江戸時代、白隠はくいんぜんじ禪師という禪僧がおいでになった。この白隠禪師のところに一人の武士が訪ねてきて、「和尚、教えてください。地獄や極楽というのはどういう世界なんですか」と聞きに来た。

そうすると、白隠禪師は、「おまえ、武士なんだろう。武士のくせに死ぬのが怖いのか。武士なら武士らしく、死ぬことなんか考えるな。おまえなんかへなちよこ武士じゃないか」って言うて愚弄するわけです。

そして、「おまえの差している刀なんか切れないんだらう。死ぬのをびくびくして、地

獄や極楽、それだけ考えているんだ。おまえ、武士らしくしろ」。しまいに、「おまえはあほか」って言ってつばを吐きかけた。

そうすると、その武士はカンカンになって怒って、「いかに高僧といえども、許せん」と言って、刀を抜いて白隠禪師に切りかかる。そうすると、白隠禪師はそれをかわして、「それ、そこが地獄じゃ」と言った。

「今、怒り心頭じゃ。それ、そこが地獄じゃ」と言って教えたわけです。

そうすると、その武士は、土下座して、「和尚、ご無礼仕った。ごめんください」と謝った。そうすると「そこが極楽じゃ」と言ったという話があるわけです。

だから、私たちは、ある意味で、今、地獄、今、極楽という世界を持っているわけです。心の中に。死んでから行く世界でもある。けれども同時に今、私たちの心の中にある世界なんだと、こう思っていたきたいわけであります。

嫁と姑の対立なんてそう簡単にうまくいくわけではないのです。この世の中は、要するにご縁の世界だと思っておいてほしいんです。ご縁の世界というのは、えにし、しがらみで生きていかないといけないのです。

そして、私たちは今その一つの状態にあるわけです。でも、状態と本質とは全く違ったものです。例えば、降ってる雪。雪が溶ければ水になります。富士の白雪が溶ければ水になるわけです。そして水が今度蒸発すれば水蒸気になるわけであります。お湯になって、水蒸気になっていく。水蒸気になると再び凝縮して、雨になって落ちてくる。そういうふうにH₂Oという分子もいろんな状態の変化をしているんですね。

人間もご縁の世界の中で周りの環境によっていろいろと状態が変わってくるわけであり
ます。

例えば世の中の者が、全員が勤勉になることはできません。アリの世界を見ても、ある昆虫学者に聞いてみたのですが、二割が勤勉で、六割が普通で、残りの二割が全く怠け者だという結果です。どのアリの集団を見てもそうなっているのです。二対六対二です。

今度は、優秀な二割のアリばかり集めたんです。そして集団をつくる、コロニーをつくるわけです。そうすると、最初はみんな勤勉に働いているのですが、そのうちに六割は普通に戻っちゃう。あとの二割は極端な怠け者になっちゃったというわけです。

今度、極端な怠け者の二割ばかり集めてきてコロニーをつくったら、たちまちそのうちの二割が優秀に働き始めた。それから、六割が普通に働き始めたということになったそうです。

だから、私たちでもそうなるわけです。高等学校で一番、二番ばかり集めても、一流大学でもすぐに落ちこぼれが出てくるわけです。

そういうふうに、これはご縁の世界なんです。私たちが生きているのは。この世の中でみんな縁を持って生きているんだと覚えていただきたいのです。

この世の中では、ある意味ではいろんな人が必要なんです。病人もいてくれないとお医者さんが困るわけです、犯罪者がいてくれないと弁護士さんが困る。いろんな人がいてくれるおかげでこの世の中が成り立っているわけです。

そうすると、私たちの人生というものはどういうふうに考えればいいのか。私たちの人生というものを私自身の考えで説明させてもらおうと、結局、私たちは「人生老死号」という列車の乗客なんだと考えております。

「人生老死号」。この列車は老いと死に向かってまっしぐらに進んでいく列車です。皆さんと一緒に私たちはこの列車に乗り込んでいます。そして、老いと死に向かってどんどんま

つしぐらに進んでいく。皆さんが高い金を出すからちょっと引き返してくれと言っても、絶対若さに戻るわけにはいきません。必ず一方方向に進んでいく列車であります。

そして、この列車には終着駅がありません。どこまでも走り続けている列車なんです。次々と各駅停車で駅にとまることに新しい乗客を乗つけて、そして、老いと死に向かってずっと走っていくのです。

皆さんが降りる駅。これはわかりません。どの駅で降りたらいいいのか全然わかりません。しかし、皆さんが静かに耳を澄まして、仏様の声に耳を傾けていると、やがて皆さんに声が聞こえてくるだろうと思います。

「おまえ、次の駅で降りなさい」と。次の駅で降りなさいと言われ、私たちは降りていく。そうしますと、接続列車が待っています。それを「仏号」と名づけております。この「仏号」というのは超デラックス列車。お浄土に向かって私たちを運んでくれる列車なんです。

「おまえ、次の駅で降りなさい」。その声が聞こえてきたら、私たちみんなに挨拶すればいいのです。

「皆さんと一緒に人生老死号に乗って旅を続けさせていただきました。でも、私、もうそろそろ降りろという声が聞こえたもんで、次の駅で私は降ろさせていただきます。残られた皆さんは、どうか快適な旅を続けてください」と言って降りていく。そうすると、それが布施になるんだと思うてください。

私たちが死んで列車を降りていく。それは死ぬことなんです、死ぬことが一つの布施なんだと思うてください。

なぜかと言えば、私たちがいつまでも乗っていると列車の座席は空きません。空席がな

い。「いや、私は立ったままの乗客なんです、座ってなんかいません」と言われる方もおいでになるかもしれません。しかし、立っている人でも降りてもらわないとやっぱり窮屈なんです。

例えば、人間が二万年ぐらい長生きしたらどうなりますか。みんな二万年も長生きしたら、あっちに石器時代の人がいったり、その辺に鎌倉時代の人がいったりして、地球は超過密になつてしまいます。

だから、新しい人間が生まれるためには、新しい生命のために降りていかないといけないんです。降りと、それが布施なんだ、死ぬことが布施なんだと思ってください。

だから、「私は降ろさせていただく。皆さん、どうもありがとうございます。皆さんは快適な旅をお続けになってください」と言つて降りていく。そうすると布施になるんだと、私はそういうふうに通じているわけがあります。

この世の中、結局、みんないろんな状態で、いろんなあり方でご縁の世界にお互いに関係性を持つて生きているわけがあります。

嫁と姑というのいろんな関係性の中で生まれてくる問題です。大体お姑さんがいないことには夫がいなかったんですから、夫だけがいればいい、お姑さんなんか要らないと、こうはいきません。幾ら憎いお姑さんでもいてくれないと困るんだから。それがご縁の世界のありようだと私は思っております。

つまり、心の中で私たちはみんなある一つの役割を務めているわけです。いろんな役割がある。貧乏人の役割も必要なんです。金持ちの役割もやってもらわないといけない。

健康な役割もないといけないし、病人の役割もないといけない。優等生も必要なんです。ど、劣等生だって必要なんです。劣等生がいないと優等生が生まれないんですから。だか

ら、みんな役割を持ってこの世の中で生きているわけであります。

そうすると、私たちがこの『人生老死号』の中でいろんな役割を果たし合いながら生きていただいているんだ。そのいろんな役割。そして、『仏号』に乗って仏様の国に行つたとき、じゃあ、一体だれが褒められるのかと考えてもらう。

この世の中でいい役割を演じた人はいっぱいおいでになります。金持ちの役割をやり、優等生の役割をやつて、あるいは、いわゆる勝ち組の役割をやった人もおいでになる。

しかし、仏様はどういうふうに、阿弥陀様はどう思つておられるか。きつと貧乏な役割、つまらない役割を務めた人のほうにむしろねぎらいの言葉を言われるんじゃないかと、私は思っております。

演劇というものはそういうもので、水戸黄門をやるにも、水戸黄門だけ、主役だけじゃできないんです。あのドラマは。やっぱり悪代官も出てこないといけない。悪徳商人も出てこないといけない。そして、助さんも格さんも必要だし、由美かおるも出てこないといけない。いろんな役割がある。

でも、逆に、悪代官の役割を務めたやつ、「おまえなんか要らなかつた」と阿弥陀さんに言われるでしょうか。そうじゃないと思います。「おまえに悪代官の役割をちよつと押しつけちゃつた。シナリオ上、どうしてもおまえにあの役をやってもらわないと困つたのでやらせたんだ。でも、辛かつただろう。おまえ、あんな役割をやらされてきつと辛かつただろう。でも、おまえは立派に果たしてくれたね。だから、私のシナリオがうまくいったんだよ。ありがとう」と言つて、きつとねぎらいの言葉をいただけるんだらうと、私はそう信じているわけであります。

ここにお集まりの大半の方が貧乏くじを引いた方だらうと思います。そんなにいい役割

を務めたわけじゃない。ちょっと嫌な役割、損な役割、貧乏な役割、貧乏くじを引かされた。そういう人がいっぱいいらっしゃるだろうと思います。

それじゃあ、主役を務めた人に対して阿弥陀さんが悪口を言われるわけじゃない。でも、主役を務めた人はこの世の中で喝采を浴びたんだから、おまえはあれでいいだろう。「ありがとう」とは言ってくれるとは思いますが。

しかし、それよりは、端役を務めた人、嫌な役割を務めた人に対して、「おまえ、辛かっただろうね。よくやってくれた。ありがとう」と言って、きつとねぎらいの言葉を言ってくださる、私はそう信じているわけでありませう。

法然上人もそう思っておられる。むしろ私たちは、状態としては、悪人の状態というシナリオ上、こういう状態で演じざるを得なかったわけです。そういう状態としては、法然上人なんかは流罪になっておられる、苦勞されたんです。

しかし、その状態で阿弥陀さんとはやかく言われることはない。むしろ、悪人の役割を務めざるを得なかった人に、「済まなかったね。おまえ、よくやってくれたね」と言っていただけだろうと思います。

私がお袋に言いたかったのはその点で、お袋に説明したのもその点であります。「お母ちゃん、お浄土に持っていくお土産って何か言うたら、これな、物は持っていかれへんで」

いくら物を持っていくこうと考えると、財産をしこたまためたところで持っていくわけにはいかない。お金だって持っていくわけにはいきません。

そうすると、お浄土に持っていくものって一体何なんだと考えますと、それは、「お母ちゃん、お浄土へのお土産というのは思い出なんだ」

それも美しい思い出と言っておきましょう。「お浄土に持っていってお土産になるものは、物やあらへん。物は持っていかれへん。ただ、美しい思い出話。これがお土産になるんやで」。そう教えたわけがあります。思い出話です。そして、美しい思い出話です。

じゃあ、美しいというのはどういうことかといいますと、どこそこの観光地に行ってきた。美しかったで、あの景色はよかったでと、そんなのは美しい思い出にならない。なぜかと言えば、お浄土のほうがもっと美しい世界なんです。

それじゃあ、ご馳走を食べた。あそこでフグを食べた、おいしかったで、あのビフテキはおいしかった。そんなもの思い出話にならないんです。だって、お浄土のほうがもっとおいしいものがいっぱいあるのです。

そうすると、私たちがお浄土に持っていくお土産って何なんだと言ったら、これは、私たちがこの世の中でやった苦労話です。

私たちがこの世の中で苦しみ、悩み、そして、悲しんだ。これが光に対する影の部分であります。この影の部分こそまさに思い出話になるんだと。お浄土は光ばかりの世界なんだ。光だけの世界に行つて、お浄土にないものと言えば、この影の部分です。悩みもちつともない、苦しみもない、悲しみもちつともない、それがお浄土の世界なんです。私たちはそのお浄土にいる、すでに往っているお父さん、お母さん、おじいちゃん、おばあちゃん、あるいは、中には、夫、妻、あるいは、我が子が先に往っているケースもあるわけです。

そこでお互いに話し合うことができるのが苦労話です。悩んだり悲しみの涙を流した、その話がお浄土のお土産になるんだと、私はそうお袋に教えたわけであります。

そして、お袋に言いました。「お母ちゃん、そやけど、お母ちゃん安心し。お母ちゃん

いっぱい苦勞話持つてるから、お父ちゃんきつと喜んでくれるで」。

父がなくなつたのは敗戦直後のころ、あの物ない時代で私たち四人の子供がいて、それにお姑さんまで抱え込んで、四人の子供を女手一つで育てていけないといけない。

「お母ちゃん苦勞したんやな。でもな、お母ちゃんその苦勞、それがきつとお父ちゃん喜んでくれるで。いい思い出話になるから。お母ちゃん、いっぱいお土産を持つてる。だから、安心して逝きな」って言つて教えたわけであります。

この世の中でいろんな苦勞があるわけです。物質的な貧乏の苦勞もあった、四人も子供たちを育てなきゃいけない。しかも、お袋は四人とも大学までやってくれて大変だったと思うわけです、よく育ててくれたなと思います。

そして、お姑さんとの対立もあった。善意がありながら対立するのは、この世の中の縁の世界なんです。

でも、人間ってそういう縁の世界にいろんな役割を務めざるを得ないんです。「あなたお姑さん」と思つて憎む、その心が結局地獄になっちゃうんだろうと思つてください。

確かに、対立し、腹も立てた。でも、お浄土に行つたらきつと話し合えるな、もう一度和解できるな、そういう心のゆとりが少しでも生まれれば、それがお浄土になるんだと、私はそう思っている次第であります。

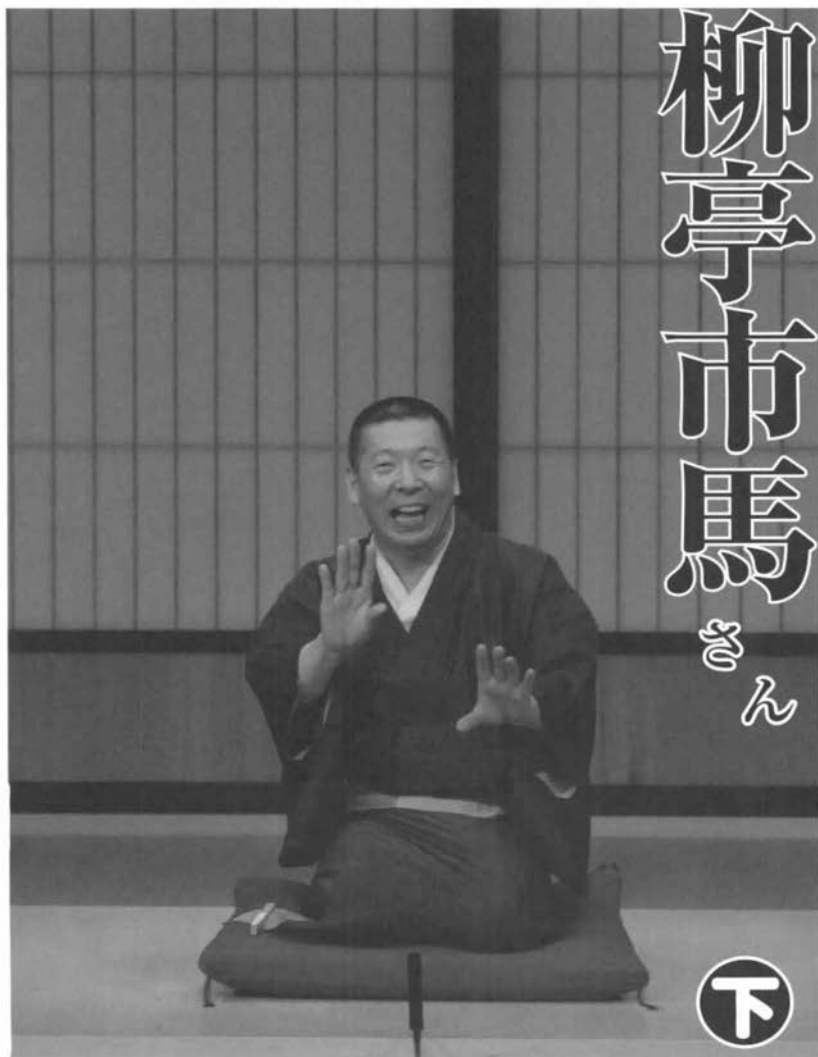
ここにお集まりの皆さん、ほとんどの方は十分苦勞されて、悩みを持ち、悲しみの涙を流されて、立派なお土産をお浄土に持つていかれると思います。どうかすばらしいお土産をお持ちになって、お浄土に往つていただきたいと思ひます。

(了)

連載

会いたい人 関 容子

柳亭市馬
さん



下

撮影／タカオカ邦彦

市馬さんが少年のころ、歌と同じくらいに興味を持ったのが落語。当時の五代目古今亭今輔は新作のおばあさん物を得意として、「青空おばあさん」など独特のタミ声で熱演した。「今輔さんのおばあさん、唾を飛ばして熱演するのが本当のおばあさんに見えて、あれ、何あれ？」と思つたのが落語に興味を持ったキツカケです。

それから春風亭柳好師匠、柳橋師匠ね、眉毛ボサボサの。この二人が大好きになりました。円生、正蔵（のちの彦六）師匠は人情噺、芝居噺が得意で、こつちはやや高尚な感じがしましたね。

でもだんだん見てくうちに、本当に好きになったのが金原亭馬生師匠です。余計なことやらずに淡々と落語だけをやって、地味がまたいいんですね。庶民的な感じだし。弟子入りするならこの人だと思つたくらいですけれど、もし行つてたら、私が前座のときに亡くなつてましたから。弟子にとつてそれはつら

いことですからね」

剣道の縁から小さん師匠に入門。小幸の名で四年五か月の前座修業ののち、めでたく二つ目に昇進してさん好と改名する。

「本名が泰幸なんで、さん幸がいいじゃないか、つて言われたんですが、私は柳好師匠が好きだったんで、どうしてもさん好にしたいんですが、つて言ったら、いい顔しないんです。でも、お前がいいっていうんなら勝手にしろ、つて言われてそうになりました。あとになつて先輩の（鈴々舎）馬風師匠から聞いたところでは、前にさん好というクビにした弟子がいて、師匠はいやなこと思ひ出すからだろう、ということ、それならそう言つてくれればよかったのに、と思ひました。

二つ目になつて七、八年して、私が日刊スポーツ新聞社主催の『につかん飛切り寄席新人賞』をいただいたときに、師匠はもうほかから聞いてて、私が報告に上がったときは褒美の帯を買つて待つてくれました。『さん

小さん師匠とツーショット。



好の名前で、無理言つてすみませんでした』
『いいよ、お前がいい名前にしてくれたから、
俺はもう忘れたよ』って。どつと涙が出まし
たね。嬉しくって」

小さん師匠の思い出となると、やっぱり前
座のころに内弟子として起居を共にしていた
時代にさかのぼる。

「師匠が六十過ぎに私は入りましたから、も
う大酒はしませんでしたが毎日決まって三合、
冷やで晩酌でした。私はこの図体で、なめる
のもダメで、その点不肖の弟子でしたね。」

昔の人らしく鰻と天ぶらが好物で、行きつ
けの店には井が二つずつ預けてあるんです。
重箱の隅を突つくのが嫌いで、鰻井、天井の
ために自分用と連れの分と、マイ井が二つず
つ置いてあった。最後に汁かけたりしてかつ
こむのが好きなんです。鰻は湯島天神下の
小福、天ぶらはやはり湯島の天庄。それに新
宿末広亭のはす向いの天春。ここはしじみ汁

がたつぷりなんで、おい、しじみ汁行こう、なんてときき連れてっていただきました。師匠は肉食漢でしたから、晩年喰いてましたよ、近ごろ俺も少食になって、寿司も二人前しか食べられなくなった、なんて（笑）

内弟子時代、『寿限無』とか『たらちね』とかのいわゆる前座噺で稽古をつけてもらう。

「一門でだいたい決まってて、うちの場合は『道灌』です。例の太田道灌が俄雨に遭って、賤女の差し出す山吹の花が簪一つだにない、という心が歌道に暗くてわからなかった、という噺。これを寄席で聞き憶えたり、速記本を見て憶えるんですが、うちの師匠は差し向いで稽古はつけてくれません。高座でお客さんを前にしないと気持が入らないから、お前は横にいてその呼吸を盗め、つてことなんです。」

でも、兄弟子たちに言うてくださって、昼間、小満ん師匠とか扇橋師匠とかが突然来て、稽古をつけてくれたりします。扇橋師匠はラ

ンニングにステテコ姿で、教えてんだか何だかよくわからない（笑）。

そこへ行くと、志ん朝師匠の教え方は正反対でしたね。忙しい方なのに、二つ目になってからですが、お願いしてみたら、いいよ、つてお宅へ呼んでくれて、差し向いでちゃんと高座着を着て、たった一人のためにきっちりやつてくれます。『小言幸兵衛』を教わったんですが、あれは私にとつて宝みたいな噺で、今も教わった通り、そのまんまやつてます。大家が店を借りに来る人間にいちいち文句をつける噺ですが、実に流麗で聞いていて惚れぼれました。様子のいい男が借りに来て、町内の若い娘と心中沙汰になるから貸さない、という芝居仕立てのそこなんか、実に楽しそうにやつてましたね。

終つてからも、こういうところはこうで、つて手つきとかも詳しく教えてくださつて有難かったです」

噺を憶えるのは、もっぱら風呂焚きの時間

と、犬の散歩のときだった。

「毛が長くてクシャクシャのベキニーズで、もうおじいちゃんでしたが利口な犬でした。師匠のそこは入り組んでて車が入ってこれないんですが、歩いてくるその足音でわかるんですね。私たちは犬で師匠のお帰りを知るわけです。犬の散歩のお供で外へ出られるのが私は嬉しくてね。もうちよつと行こうとすると、急に動かなくなつて、うちのほうじつと見てる。わかつたよ、帰りますよ、つてね。もう少し外で息抜きがしたくても、仕方なく切り上げます」

犬の名は李兵衛^{ちくべえ}。『お化け長屋』という噺に古狸の李兵衛という野暮な長屋の住人が出てくる。そう言えば小さん師匠は狸の絵がお得意で、どこことなく自画像めいた愛嬌のある狸に「他抜」（たぬき）と添え書きした色紙を湯島のどこかのお店で見た覚えがあった。「李兵衛さんも私とのつきあい三年かそこらで亡くなりましてね、師匠が段ボールにその

亡骸^{なきがら}を入れて、『李兵衛の霊』と墨書して、涙ポロポロ流しながらお経上げてました。師匠の宗派は木琴みたいなものを叩いて、踊り出したくなるような陽気なお経でしたけどね」市馬さんは師匠が泣いている姿を三回見たことがあるという。

「人の葬式に出て泣いたりするような人じゃないのに、私が見てて三人だけありましたね。一人は大阪の六代目松鶴師匠が亡くなったとき。若いころから兄弟分のようにして親しかったそうですから。もう一人は藤山寛美さん。大の蟲屋だったみたいです。」

それから三人目は、初代辰之助さんのとき。息子さんに先立たれたお父さんの二代目松緑さんの氣持を察してたまらなくなつたんだと思います。師匠があんなに泣いてる姿は見たことがありませんでした。松緑さんは大正二年生まれ、うちの師匠は大正四年生まれ。共に大正会のメンバーで、お正月なんか紀尾井町のお宅に招かれて一度やつたりする親しい

仲でしたからね」

ところで小さん師匠には二人の孫がいて、兄はバレエから俳優に転じた小林十市、弟は噺家の柳家花緑。市馬さんは二人が小学生のころをよく知っている。

「弟の花緑の本名は小林九ですが、ごく小さいころから九太郎という名前で落語をやりました。そのうち芸名が小緑になって、それから花緑になるんですが、この緑の字は松緑さんのお名前からいただいてくるくらい、師匠は松緑さんが好きだったんですね」

市馬さんは小さん師匠が鹿芝居（噺家の芝居）で『忠臣蔵』七段目のおかるに扮した写真を見たことがあるという。

「まるで松緑さんみたいな肥満体のおかるが九つ梯子を降りてくるところ。横にいる由良之助は円生師匠で、それは色っぽくて素敵なんですよ。このときの『道行』のおかるは志ん生師匠で、勘平は柳橋師匠。みんな踊りができる、芝居は知ってる名だたる中で、うち

の師匠だけまだ若いから花四天（はなよてん 捕手）の役が来た。そしたらその日は仕事があるから、って断ったそうなんです。その旨を円生師匠に弟子が報告したら、お前ね、花四天だから来ないんだ、七段目のおかるか何かそう言ってみなさい、絶対来るから、って言われて、すぐにそうしたら、うん、やる、って出て来たそうです（笑）」

円生師匠が亡くなるのは昭和五十四年九月のこと。その翌年の二月、市馬さんは小さん師匠に入門したので、惜しいところで実物に会えなかった。もっと以前に亡くなっている志ん生、文楽両師匠にももちろんじかに接していない。

「正蔵（彦六）師匠には長生きしてくれたおかげでお会いしてます。正蔵師匠は文治師匠という方と上野稲荷町の二軒長屋に住んでました。志ん朝師匠は正蔵師匠にきちんと楷書の芸の手ほどきを受けたおかげでお父さん（志ん生）の八方破れみたいな草書の芸がわ

かるようになったと、とても感謝しておられましたからね」

私はあいにく正蔵師匠とは面識がなかったが、その御子息の舞踊家花柳衛彦師匠（もりじこ）とは親しくしていただいていて、落語の『品川心中』を師匠が舞踊化し、志ん朝さんと踊った舞台の映像を見せてもらったことがある。二人とも実に楽しそうだった。

そして二軒長屋の片方の住人、桂文治師匠にはずいぶん昔、何度か訪ねて話を聞いたことがあった。玄関の格子戸を開けるとすぐに居間で、中が丸見え。長火鉢をはさんで老夫婦がいつもお茶を飲んでいた。出されたお茶菓手に手をつけないでいると、帰りにはおかみさんが半紙でくるんでそのお菓子を持たせてくれた。

「ああ、昔の暮しがいい感じですね。文治師匠のことを地下鉄の定期を首からさげて寄席通いする始末屋だ、とか何とか言うやつもいたようですが、自分のことは始末しても使う

ところはちゃんと使う人なんだそうです。たとえば正月に前座たちにくださるお年玉ですが、普通は初席（はつせき）か二の席までに会わなければそのままにしてしまうんですが、文治師匠は袋に相手の名前を書いてずっと持っていて、三、四月になつてからでもちゃんと下さったそうですからね。そういう律儀な人だったそうです

さっきの話、稲荷町から地下鉄で寄席へ通うんですが、その定期券を仕事以外のときは決して使わない。駅員さんが顔知ってますから、師匠、定期は一日に何回乗ってもいいんですよ、つて言うのと、いや、これから私用で買い物に行くんだからね、ここには通勤定期つて書いてある、つて（笑）。そういう律儀な人でした」

小さん師匠は面と向つて稽古はつけないが、たまに弟子の嘶を聞いてくれた。

「途中でトイレに消えたりするんでこつちも

やめると、『どうしたつ、聞いてるんだつ』
って中から怒鳴る（笑）。それでときどきピ
シッと大事なことを言ってくれました。お前
の嘶はお客に押しつけがましい。笑わそうと
しなくていいんだよ。お客はそこに面白そう
なものがあれば、向うからのぞいてくるから。
こっちがそばまで行つて作品を発表しなくて
いいんだ、って。師匠の芸がまさにそうで、
ボソボソ言ってるんですがだんだん人物描写
とか季節感とかがはつきりしてきて、自然に
その世界に引きこまれていく。お前はそうい
う嘶家になれよ、と言われたような気がしま
す。そのためには声を通せ。まずお客に聞え
なくちゃいけない。張り上げずに、低い調子
で後ろまで声を通すことを自分で工夫して
日々鍛練するように、と言われました」

ここでふと思ひ当るのは、市馬さんの一番
弟子、現在二つ目の市楽さんから聞いた話。
彼は早稲田大学卒業後、普通に会社勤めをす
る道を歩むつもりでいた。それが突然市馬さ

んの嘶に魅せられ、弟子入りを願ひ出たとい
う。

市馬さんの話では、上野の鈴本の出入口に
待ち伏せされて、思ひつめた顔でスツと寄つ
てこられたときは一瞬恐怖を感じましたね、
とのことだが、市楽さんは師匠のどこにそん
なに魅かれたのだろう。

「それは、僕がやだなと思うようなことをい
つさない芸だったからです。しかも声が
よく通つて、怒鳴つてないのにちゃんと届く。
ああいう嘶家になりたいと思いました」

これはまさに市馬さんが小さん師匠の望ん
だ通りの嘶家になっているのを、後進によつ
て立証されたようなもの。めでたい限りだ。

市馬さんは三十一歳のときに真打昇進、さ
ん好改め四代目柳亭市馬を襲名した。小さん
師匠はその九年後、平成十四年五月十六日、
八十七歳で大往生を遂げた。

この夏、市馬さんのかつての兄弟子、立川

平成5年、真打ち昇進披露での市馬さん（右から3人目）。



談志を主人公とした『人生成り行き』というテレビドラマが放送され、市馬さんは小さん師匠の役で出演した。

談志さんは真打昇進試験制度に問題があるとして当時の落語協会々長の小さん師匠に異を唱え、協会を飛び出して立川流を創設。結果的には破門という形になってしまった。

「うちの師匠としては、また始まったか、あれも病気だから仕方がない、くらいの気持ちで

いて、早いとこ頭を下げに来ちゃえばどうってこともなくすんだんだと思います。個人的には弟子は可愛いんですからね。しかし会長としての立場もあるし体面もあります。一方の談志師匠には意地がある。それで時間がたつてしまつて修復がこじれたんですね。

師匠が亡くなつた日の夜遅く、誰もいなくなつた明け方近くにでも、談志師匠が来るか、たとえ酔つても来るんじゃないか、と思つてずっと待つてましたけど、ついに現れませんでした。聞いたところでは、湯島で師匠のお通夜だと言つて酔いつぶれていたそうです。晩年の師匠は、談志も一派をなして、いい弟子も出て、あれでよかつたんじゃないか、と思つてたんだと思います」

ドラマでは、談志臨終の際の空想シーンとして、市馬さん扮する小さん師匠と仲よくじやれ合うようなところがあつて救われた。

現在の落語協会々長は小三治さんだが、その会長に指名されてぐつと若い市馬さんが副

会長をつとめているのも、その円満な人柄ゆえだろう。

柳句会のメンバーで小三治さんと親しい評論家の矢野誠一さんも、市馬さんについてこう語っている。

「正統派で、歌がうまいという得意技を持っているのが強味。個人芸は人間性が勝負どころだけど、市馬が嫌いという人に会つたことがない。小三治さんは自分がストイックだから、そうでない人を副会長に選んだんでしょうね。うまい人事だと思いますよ」

(この項おわり)

人間というのはまことに無知なもので、自分の身が老いゆき、老いから逃れようもないのに、他人が老衰したのを見ると、自分のことは柵にあげて、面倒に思い、恥じ、嫌らしいと思う。しかし、私もまた、老いゆき、老いから逃れようもないのだ。それなのに、それなのに、ほかならぬ私の私に他人の老衰を見て面倒に思い、恥じ、嫌だなど思っている。これは私にとってふさわしいことではない。

テレビのコマーシャルで、誰もが知る往年の男性俳優を、ひさしぶりに見た。思わず口に出る。

「あら、ずいぶん年取ったなあ。皺が増えて完全にオジさんになってる」

食器を洗っていた妻、背を向けたまま曰く、

「お互い様なんじゃない」

ですよね……。

お手洗いの帰り、洗面所の鏡に映った昭和四十年式の自分と、顔を近づけてよくよくご対面。増えてる、増えてる、頭はゴマ塩、顔には細かいスジ、そして大きいはん点……。そういえば、夏前にやった健康診断、身長が去年より五ミリ縮んでたっけ。

俳優さん、ゴメンナサイ。

＊

編集の仕事。

やっと印刷・製本までこぎつけ、刊行予定日に間に合って納品されたばかりの本。安堵と喜びにひたつたのもつかの間、誤植があったと報告を受ける。

「パーラミーター（波羅蜜多）のはずがパーラミーターになってるよ」

うっそおっ!? おかしい!

全身に一気に汗が滲み出る。「そんなこと……」と、確信なのか期待なのか自分でもわからずつぶやきつつ、机の引き出しから校正紙をひっぱり出す。

ほーら、校正したときはちゃんとして……なっていない!

メガネをはずして見てみた。ちゃんとして「バ」になっていた。

*

参道の雑草が伸びてきた。七月二日に施餓鬼会を控えた六月中旬のこと。

植え木が多くあるから、除草剤は使わず鎌で刈るようにしてきた。蒸し暑さに辟易しながらも、いつもどおり立ち鎌で草刈り開始。ふつうの鎌だとしゃがんでの作業になるが、これは立ったままだから楽チン!だった、以前は。

十分、二十分……。腰が痛くなってきた。右足の先までピンと突っ張る。痛い。背中を後ろに大きく反らしてリフレッシュ。はじめは十分おきくらいでよかった「反らし」の間隔が五分に、あげくは二、三分ごとにやらないと、辛くてしょうがなくなった。前はこんなこと、なかったようなあ。

夕方、接骨院に駆け込み、電気治療とマッサージ。ああ、気持ちいい。

*

山本周五郎の作品が最良。とくに、いわゆる「長屋もの」。

「金太郎飴切ったみたいなの、同じようなハナシばっかじゃん」

悪態をつかれる御仁もいらっしますがね、そこがイイんじゃないですか。お気に入りだった何冊かを、最近また読んでみた。妙なことに気づいた。似たような表現がよく目に飛び込んでくる、イヤ、心にチクッと小さな痛みを与える。十年ほど前、初めて読んだときはまったく気にならなかったのに。

登場人物であるどこそこのご隠居さんとか、長屋の大家さんとか、なんとか藩の重役のなんのだれ兵衛を説明する際、「老境に入った」とか、「初老の」とか、しょっちゅう「老」の形容が付いているのだ。「老」とあるから「老人」なのかと思いきや、すぐその後には「五十をこえたばかりの……」などとある。

五十って、老境なの？ 「老」って、何歳から？

そうそう、江戸時代の話だからきつとそうなんだ、江戸時代だから……。慰めになっていない。

小生、来春、お江戸に桜咲く頃、四十九。

皆さま、お健やかによいお年を。

（小村正孝）

小説
快僧渡辺海旭

壺中に月 を求めて

前田和男

第四十七回

第二部

ライン
来江の古城遥かなり

碧眼の比丘、ニヤーナティロカ その6



★前号までのあらすじ

時は明治の中葉。家業が傾き寺に出された渡辺芳蔵は、小石川源覚寺住職端山海定の下、十五歳で得度し「海旭」を名乗る。才気煥発ゆえ将来の宗門幹部として浄土宗学東京支校、同本校へ進学を許され、さらに明治三十三年（一九〇〇）、浄土宗海外留学生として、廃仏毀釈で打撃を蒙った仏教再生の興望を担って、当時印度学の拠点であったドイツはストラスブルク大学へ留学。碩学ロイマン教授の薫陶を受ける傍ら、キリスト教改革派、社会主義者らと交わり、社会福祉事業など仏教以外の知見を深める。そんななか、ヨーロッパ初の比丘が誕生したと知り強い関心を覚える。法名は三界の智者を意味するニャーナティロカ。しかし、すでに彼は、海旭と行き違いに、南伝仏教の聖地セイロン（現スリランカ）に渡って修行中。爾来十六年、碧眼比丘が来日、ついに二人に邂逅の時が訪れた。所は海旭が帰国して住職をつとめる深川は西光寺。すでに海旭は日本を代表する社会派和尚。ニャーナティロカは国際仏教界の泰斗となっていた。碧眼比丘は、作曲家志望がなぜビルマで比丘になり毒蛇に悩まされながらどんな修行生活をおくっているかを語り終えると、仏教帰依の彼我の違いを想う海旭に救貧活動について質問を投げかけてきたのだった。

法然上人七百年忌と
浄土宗労働共済会

蛇談義がひと段落したところで、ニャーナティロカは「貴僧は最下層の人々のために救貧活動をされていると伺ったが……」と訊ねて話題を切り換えた。どこで聞き及んだのか碧眼比丘が関心を覚えたのは海旭が大いに熱をいれている「浄土宗労働共済会」のことらしい。渡辺海旭は答えを返す前に、その立ち上げの経緯を胸中で反芻した。

海旭が帰国した明治四十三年（一九一〇）は、宗祖である法然上人七百年忌を翌年に控えており、宗門では様々な記念事業が企画されていた。しかし、その多くはその年限りの催事で、宗務所につめて机にむかって企画をたて指令をとばすだけという、形だけの事業のようで、宗門首脳もどこかでそれでよしとするところがあった。しかし、せっかくなら宗祖も納得してくださるような、後世にも残

る事業はできないものか。海旭はそう考えて、頭に浮んだのが、地元の深川で、貧窮者のための無料職業紹介所と宿泊所を開設することだった。

これを思い立ったのは、散歩がてらに、自坊・西光寺のある深川から生まれ育った浅草にかけて路地路地をくまなく歩いてみて、窮民たちが住む地域が増え、生活状態もむしろ酷くなっている印象をもったからだ。また、これは韓国併合によるものだろうが、朝鮮半島からやってきた人々が増えて、集団で生活をし、この貧窮状況も見るにたえなかった。海旭が留学したときから比べると、ロシアとの戦争にも勝ち、製鉄などの基幹産業も起り、国力はあがったはずなのに、底辺の人々の救貧ぶりはない、いったいこれはどうなっているのだ。地元の寺としてもなんとかしなければならぬ。ドイツ留学時代に社会主義者やキリスト者たちによる救貧活動を実践的に学んでおり、それを日本で生かしてみた

いという願望もあった。

思い立ったら、身体が勝手に動いていた。さっそく西光寺から歩いて十分もかからない浄土宗の名刹、両国回向院の住職、本多浄厳に持ちかけたところ、ぜひわれらの地元でやろうと乗ってきた。思えば回向院は、海旭が師とおおぐ福田行誠が住職をつとめた寺であり、これも仏縁だと海旭は感じ入った。

海旭は「下級労働者生活状態の改善及び之が慰藉と理想的薰陶」を目的とする「浄土宗労働共済会」を立ち上げ、深川に無料職業紹介所と宿泊所を開設することをもって、法然上人七百年忌記念事業の目玉とすることを宗門に働きかけて認められた。仏教系ではこれほどの規模と中味の「社会事業」はおそらく初めての試みだった。

西光寺に寄宿する門下生を総動員して準備にかかって一年余の七月一日、ついに深川区西平野町に浄土宗労働共済会宿泊所が開所。当初の概要は次のようなものだった。

- 一、仕事もなく家もない貧窮細民は、五錢を前納すれば、蚊帳と寝具二枚が支給されて毎日入浴と宿泊できる。
- 二、食事は十五錢で三食が用意され、仕事があるものには携行用の弁当箱が貸与される。(ちなみに当時の一錢ではアンパン一個が買え、五錢では山手線の初乗りができた)。
- 三、毎日夜八時になると、講堂の仏前に全員が集まり、勤行の後、十時までは自由時間とし、新聞雑誌を読んだり囲碁将棋などをして過ごすことができる。
- 四、失業者にはまず雑業に就かせ、ついで定職が世話されて、貯金が奨励された。
- 五、特筆すべきは、診療所と病室を付設、花柳病専門の医師と労働者健康診断の医師を常駐させていることだった。

セイロンの アウトカーストへの救貧活動

はてさて、わが浄土宗労働共済会の活動を碧眼比丘にどう説明したものか、海旭は少し瞑目して内容を整理しようとして、ふと疑念がわいた。ニャーナティロカの依拠する南伝仏教は自己を高めるのには熱心だが、衆生を救うことにはそれほどではないとどこかで思いこんでいたからだ。したがって、碧眼比丘が社会の最下層に対する救貧活動に関心をもちのが少々解せなかった。そこで遠まわしに訊いた。

「ところで、最下層の人々への救貧活動について、どのような関心がおありなのか」

碧眼比丘が返した言葉に海旭は大いに驚いた。「最下層とは『ロディヤー』と呼ばれるアウトカーストの人々のことです。実は長年、彼らのための支援をやっております。貴僧の活動を参考にできればと思いますてね」

アウトカーストとはカーストの埒外らちがいにある

最下層の「不可触賤民」のことだ。「救貧」でも重いテーマだと面食らった海旭だが、アウトカーストとなるといつそう重苦しい。

「ご当地のアウトカーストとはちよっと違いますが、わが国にも似たような境遇の人々は存在します」海旭は幼少時に垣間見た浅草寺裏の人々のことを思いだしながら返した。「しかし、私のやっている活動は、日本のアウトカーストのための活動ではありません。そうした人々もふくむ困窮細民たちの救済です」

碧眼比丘は頷くと訊いた。「貴僧は救貧運動をいつから始められたのか」

「ドイツ留学から戻って一年半後ですから……」と海旭は一瞬思案してから答えた。「そう、一九一一年。今年でちょうど十年になります」

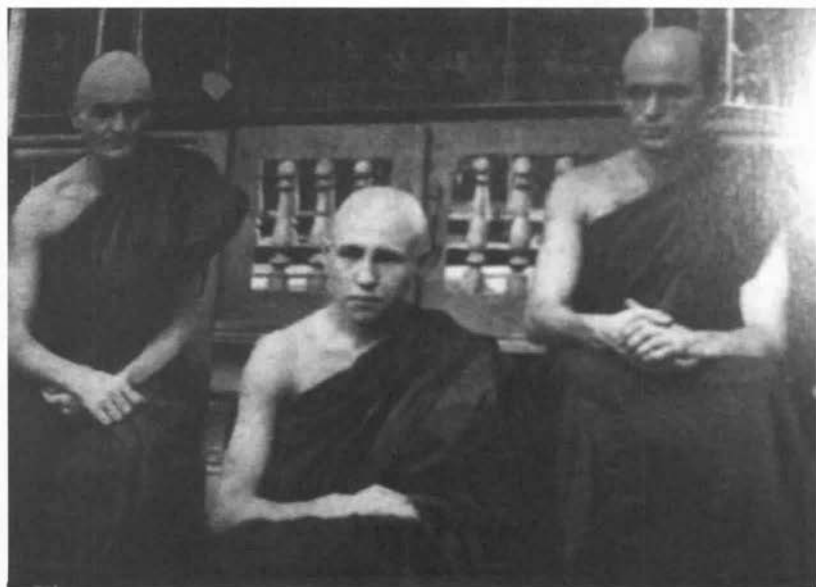
「こちらは『島の隠遁所』ができて二年してからだから、貴僧のほうが先達だ」碧眼比丘

は身を乗り出した。「参考にしたいのでどんな活動なのか、ぜひお聞かせください」

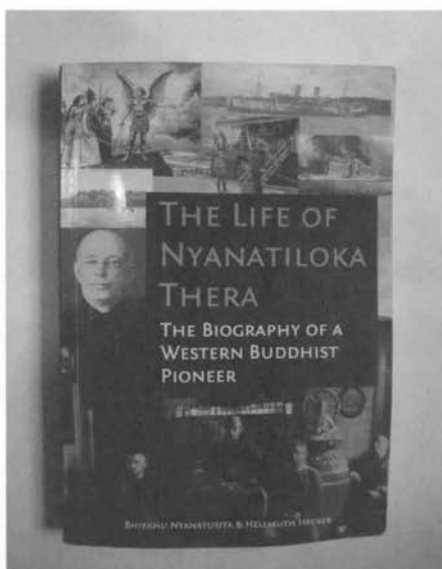
海旭は乞われるままに浄土宗労働共済会の概要をかいつまんで説明してから言った。

「それでは今度は貴台の救貧活動の番です」碧眼比丘はうなずくと、セイロンのアウトカースト「ロディヤー」の悲惨きわまりない由来と扱いについて話し出した。いままでの穏やかな話しぶりとうって変わった激越な口調に、海旭はいささか氣圧された。

「彼らは、釈迦がお生まれになるはるか遠い遠い昔、触れると穢れると、先祖たちの悪意に満ちみちた扱いによって、人間界の最下位に貶められてきたのです。そんな最下層の輩はこんなものでいいのだとぎりぎりの生活手段しか与えられなかった。それゆえに彼らは筆舌に尽くしがたい汚穢と無知と不道德の只中を生き、そして死ぬことを繰り返してきたのです。これまで彼らの悲惨な暮らしに光があたることはありませんでした。悪意のカル



比丘になって間もない頃のニャーナティロカ。修行仲間とビルマのラグーンにて。1907年



参考文献

"The Life of Nyanatiroka Thera
the biography of a westen buddist pioneer"
(ニャーナティロカ尊師の生涯 西欧仏教徒の先駆者の伝記)

2008年11月、スリランカ仏教協会刊

1926年ニャーナティロカ自身がドイツ語で記した自伝を英訳、その後1957年に没するまでについて弟子たちが資料にもとづいて記述。

マによって、彼らは世界の外側に生まれ、もつとも卑しむべき人生を送るべくして送ることを余儀なくされてきた。しかし、そうした究極の逆境にもかかわらず、彼らは数をまし、古都キャンディに幾つかの集落を形成するようになりました。政府によって彼らのための厚生プログラムが試みられたが、さっぱり効果をあげられない。そんなときに私は彼らと出会い、そして決意したのです。彼らを救うために立ち上がろうと」

碧眼比丘によると、彼はタイの王子をはじめ有力支援者に働きかけ、「ニャーナテイロカ比丘ロディヤー基金」を立ち上げて、アウトカーストのための救済プログラムを開始。まずは、セイロン最大のアウトカースト集落であるカドゥガンナワ地区で、かつてあるキリスト教の布教団が建てた学校を改修、ロディヤーの子供たちに対する教育を始めた。これを親たちも意気に感じニャーナテイロカたちのために小さな住居をつくってくれた。こ

うしてセイロンにおける極貧被差別地域の教育と道徳福祉事業はスタート、先の世界大戦の混乱で一時中断を余儀なくされたが、終戦後は元に復していまも順調に行われているという。

蛇談義で、碧眼比丘の修行と学究への献身ぶりに「これは只者ではない」と感心した海旭だが、まだまだ評価が足りなかったと恥じた。これまでまったく光が当たらなかった最下層の人々に対してこれほどの救済活動をしているとは、正直、驚かされた。そして、自身の労働共済会とほぼ同時期に始めていることにも共感を覚えた。ニャーナテイロカと南伝仏教への評価を改めなければならないと思う。

(この項つづく)

第五十七回

江戸を歩く



上野山下から
下谷車坂町へ

森清鑑

大江戸ウォーカー

家治、十一代家斎、十三代家定）、廟を守るように、その北側には東叡山御隠殿ごいんでんの敷地が崖まで続いている。この御隠殿の敷地は下谷坂本町から東叡山の西北の端を囲むようにぐるりと広がり、根岸の里を眼下に見下ろせる位置にある。

御隠殿

御隠殿とは、寛永寺輪王寺宮の隠居所のこと。幕府は天皇家をバックボーンに歴代の宮様を輪王寺宮として遇し、寛永寺の管理に当たらせ歴代の將軍家靈廟の背後に所領を用意した（JRの線路、鶯谷駅）。通常の公務は輪王寺の館に住まいし行いが、一七五四年公遵法親王は、領地の西外れに隠居所を造った。以来、輪王寺宮の所領を御隠殿と称するようになる。宮様しか歩けない領地を歩いてみよう。歴代將軍家の背後にある領地内を散策する。右手には優雅な根岸の里が眼下に広がっている。やがて左に子院の津染院、勧善院。

そして徳川家奥方様の墓所。その背後は大きく広がりを見せ、ここから言わば宮様の別邸が始まる。中央に中之島を抱く楕円変形の池。池の東側から急坂を下りる（御隠殿坂）。すると根岸の里に出る。平地のすばらしい景色。すると豪華な別邸が構えている。費用を惜しまず造られた優雅な御殿。老松に囲まれ京都風の造り。一帯の敷地は約三千坪。

宮様は通常、池庭から坂を下り、御隠殿の裏庭から入る。此処自体が館の背後を彩る庭園である。この御隠殿館の正門前には優雅な音無川の流れがある。堅牢な石造りの橋が架かっている（御隠殿橋）。音無川とは、王子権現、飛鳥山の東側を流れる石神井川の分流、王子川が上野台地の東側を伝い、根岸の里を横断して流れているのである。此処で音無川というのは、王子権現辺りの石神井川の流れがたおやかなため、音無川と呼称したところから来ている。道灌山の東側を伝い、田端村、新堀村の田畑を潤し、根岸の里つまり金杉村

に流れ込み、独特の美観を提供し、根岸の里と呼ばれるに相応しい景色を生み出している。一帯は金杉村の田園であるが、この辺りを根岸と呼ぶのは、古い地名であり、太古の昔に、江戸湾が入り込んできており、木の根のように岸辺が続いていたことによる。

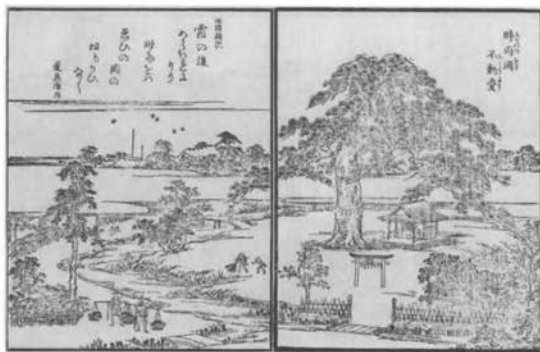
御隠殿橋通りの流れは、水鶏（水鳥）の生息場所として名高く、一層の風情を醸し出していた。御隠殿を正面から見ると、音無川には柳、橋を渡ると大きな門。左右に松の巨木。門を潜ると広い、やや円形状の庭。そこに大きな館が二棟並び、周囲は木々に囲まれ、右後方の庭には五重塔らしきものが建ち、背後は迫り上がって寛永寺台地につながっている。この豪壮な館も幕末の上野の戦争で焼失。現在、根岸薬師寺辺り一帯がその場所である。

御行の松

ここから音無川に沿って東に歩こう。周囲は金杉村の田園風景。さらさらと流れる音無

川の流音に混じって、春ともなれば鶯の声があちこちでこだましている。根岸の里の別名は「呉竹の根岸の里」、「初音の里」、「鶯の名所」。周囲は呉竹が風にそよぎ、風情のある、かやぶき屋根の家々が多く点在し、まさに文人墨客の故郷、大商人の隠居所の感。やがて日光道中に近づく川沿い

にちよつとした広場があり、小橋を渡ると鳥居、そして中央には堂々たる松の木、御行の松が立っている。覆い被さるような松の枝の麓には不動堂が立っている。御行の松とは、寛永寺の僧侶がここで修行したことにまつわる。高さ約十四メートル、目通り約五メートルの堂々たる松で太い幹に支えられ、巨大な傘のような外観。この辺り一帯を時雨



◆江戸名所図会 「時雨の岡不動堂」手前を囲むように流れるのが音無川円光寺

の岡というので江戸っ子はこの松を「時雨の松」とも呼んだ。この江戸で有名な松もついに昭和三年に枯れ、現在は三代目。樹齢三百五十年であった。雪旦は蛇行する音無川から御行の松を描く。ぼてふり風の二人が長キセルを吹かしながら松を仰ぎ見、釣り竿を肩にそこかしこに架かる橋を渡る人、たもを手に川に近づく人などを描いている。江戸古地図でもこの辺り鶯の絵、特に根岸の地名が書き込まれている（この南下、御隠殿領に鶯谷駅）。御隠殿の当主もよく此処に散歩に訪れた。

円光寺

御行の松から音無川の分流が南に下っている。少し歩くと正面に西蔵院（新義真言宗）。その隣が円光寺（禪宗臨済派）である。この辺り、鶯の名所。雪旦が描く根岸円光寺は風情のある根岸の里を彷彿とさせる。寺といつものどかな光景で垣根造りの簡易門。門を抜けると、目の前に長い縁側があり、座敷で

は坊様が客人にお茶を供している。庭と一体化した吹き抜け。辺りの自然と同化して座っているようなものである。簡易門の前には松の巨木があり、下に莫座を敷いてキセルを吹かす人物。彼の前では三、四人の女性が長キセルを持ち話が弾んでいる。この松は鏡の松という名樹。縁台に腰掛け、お茶やら酒を飲む人。親父様が水桶、火鉢の傍らで茶をふるまっている。そ

の背後には巨大な藤棚が鍵型に並び、その下で藤の花を愛でて戯れる人達。そろそろと藤棚に向かう人々の姿。この藤棚は有名で江戸っ子は円光寺のことを藤寺と呼んだ。藤棚の向こうには音無川が流れているはずで、サギが獲物をついばみ、またその向こうの木々の



◆江戸名所図会 根岸円光寺界隈の風景。右側円光寺、簡易門の前に鏡の松、左藤棚、左下弁天様

下、広場では踊っているかに見える人達。藤棚の手前には弁天様があり、この弁財天は弘法大師の作と云われる。このあけつびろげな円光寺で、幕末、勝海舟と山岡鉄舟は数度の会談を行い、秘策を練った。

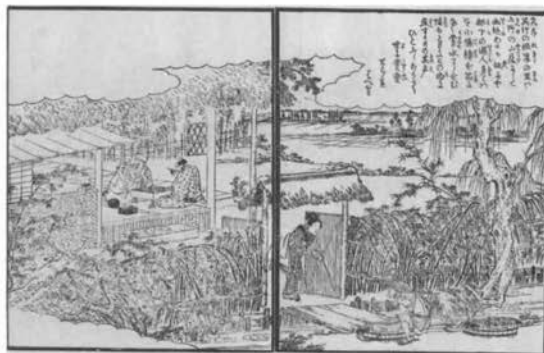
呉竹の里

ちょうど円光寺の門を左に行った曲がり角に一軒の豆腐料理の店があった。屋号は「笹乃雪」。元禄年間に創業され、東叡山寛永寺の御用達として珍重され、「笹の上に積もりし、雪のごとき美しさよ」(輪王寺宮)と愛でられたところから屋号を笹乃雪とした(現在もある。台東区根岸二丁目十五番十号)。子規も「水無月や根岸涼しき笹乃雪」と詠んでいる。

音無川支流は円光寺の南をさらに下る。雪旦が「呉竹の里」と題して描いた情景はおそらくこの小川近辺であろう。目の前に小川が流れ、ご新造さんが木戸を開けて小橋の向こ

うの魚屋さんに皿をつきだしている。腰をかめ、魚を取り出す、ぼてふり。中ではご隠居さんが碁を打っている。相手はキセルを吸い余裕の表情。ご隠居さんは思案顔。方々が庭の風情。川縁に柳や呉竹が垣根を作っている。江戸でも有数の、のどかな隠居場所として根岸の里は江戸っ子の遊興地帯となった。

根岸の里はこうした、のどかな風情のある、自然と文化の混在した地であるから、大商人がここに隠居所を設け、あるいは妾を住ませた。雪旦の絵の上には、「呉竹の里は上野の山陰にして幽趣あるが故に、江戸の遊人の多くはここに隠棲す」とある。画家、文人が多くこの地に住み、天保六年には文人だけでも三十名



◆江戸名所図会 「呉竹の里」

を超えたという。それであるから落語の恰好の舞台となる。「茶の湯」、「悟氣の火の玉」、「お若伊之助」など枚挙にいとまない。茶の湯は隠居が目茶苦茶な茶を点て茶室に招かれた客人が閉口する漸。飲めたものでないのだから客人は便所からそつと捨てる。それが近所のお百姓さんの顔にかかる。するとそのお百姓さん「また、茶の湯やつてるな」。

子規庵

明治になると、この地に子爵や官吏が邸宅を構える。円光寺の前の道を西に歩き、三本目の角を左に曲がり、南に降りると右側の角に子規庵。向かいには前田邸。正岡子規は明治三十五年に亡くなるまでこの地で俳句を研鑽する。彼が病魔に冒される前、野球に凝っていたことは有名な話。ベースボールを野球と訳したのは同じ一高出身の中馬庚だが、今日でも常用されている「直球」、「打者」、「走者」、「飛球」などは子規の訳でこれだけでも野球

殿堂入りする価値がある。

根岸の寺町

今度は、円光寺裏の道を右に行き、隣の西蔵院の角を南に曲がると浄土宗西念寺、世尊寺、永称寺、千手院、東叡山領と続く。西念寺には身代わり地藏尊がある。信長、秀吉、そして家康に仕えた才女、小野お通が通るがかりに地藏尊を発見し、ここに草庵を結ばせる。十数年後、高德の誉れ高い、浄土宗、的山上人が再び此処を通りかかり、靈驗を得て一堂を建立。阿弥陀三尊を安置した、古刹である。これらの寺が南に並ぶ寺前の道は日光道中と並行して東叡山御隠殿領の東角に至る。ここらが根岸の寺町といえる。



FORUM

浄土の広場

「浄土の広場」では

読者の自由な参加をお待ちしています。

詩、エッセイ、短歌、俳句、川柳、書評、映画評、

TVウオッチング、紀行文、その他創作等。

あるいは会員各寺院での催しの告知、報告など。
どしどし編集部にお寄せ下さい。

浄土誌上句会

●校

〈特選〉

ペダル漕ぐ下校の子等に秋暮るる

佐藤 雅子

自転車通学だろうか。「秋暮るる」は「秋の暮れ」ではなくて、季節の移ろいである。近所同士そろって登校、あるいは下校する生徒たちに、木々が紅葉し、落ち葉が散りかかるなど描いてみるのもよからう。

〈佳作〉

秋霖や母校はどうに廃校に

井口 葵

秋灯の壁に校医の白衣かな

内藤 隼人

草の穂や明治の校門海に向く

井村 善也

●出

〈特選〉

秋天へ水より出でし河馬の鼻

工藤

掉

河馬はその名のように、昼間は水中に居ることが多い。体を洗ってわずかに目と鼻を出している。たまに頭を出しては大きな口を開

けたりするのだ。その鼻に焦点を当てているところが、何となく面白い。

〈佳作〉

出目金の腹ぼつてりと売れ残る

斉田 仁

蛸海女胸丸出しに火に当たる

浜口 佳春

やや寒し朝のトーストとび出して

増田 信子

●自由題

〈特選〉

一戸また廃家となりぬ秋の風

山口 信子

全国的に地方の町村の過疎化が進んで来ており、それに町村合併が輪をかける。あちこちに空き家が目立つようになっていますが、また一戸が空いた。そのことを正直に伝えていくのだが、季語の「秋の風」がさびしい。

〈佳作〉

露地裏のいずこか薫る金木犀

森 懐人

秋霖に濡れてキリンの睫毛かな

目黒 裕

髪切つて夕風からし初紅葉

吉崎美和子



誌上句会（編集部選）

■校

校正を終えて見上げりや寝待ち月
野分さり校舎に架かる瞬の虹
悠久の校倉造り紅葉燃え
まつ 新たな校旗の靡く運動会
校庭の句碑の向こうの島は秋
校倉の床下を這う大百足
高校を出たその足で芒野へ
校庭を対角線に秋あかね
似たるもの転校生と木の実独案

■出

家を出た子に白髪見え母となり
森 懷人

浄土誌上句会のお知らせ

兼題

いま

ここで

自由題

締切・二〇一三年十二月二十日

発表・『浄土』二〇一四年二月号

選者・増田河郎子（『南風』主宰）

応募方法

●いずれの題とも数の制限はありません。

●特選各1名・佳作各3名

葉書に俳句（何句でも可）と、住所・氏名を必ずお書き下さい。

宛先

〒105-0001 東京都港区芝公園4-7-4 明照会館内
月刊『浄土』誌上句会係

■自由題

烏帽子岩出する舟なき秋寂ぶる
錦着て野山燃え出す夕景色
野辺に出て秋香まといて漂流す
十月のうすく色づく昆布出汁
村芝居死体その一出ずっぱり
猿山に猿が出そろい秋の雲
どうぶつ園出口の椅子に秋日射す
上野動物園出口集合藪からし

當問あさ子
佐藤雅子
早乙女喜栄子
月島恭子
井口吾郎
目黒 裕
小林苑を
鳥羽 梓

飯島英徳
當問あさ子
佐藤雅子
早乙女喜栄子
山口信子
月島恭子
鳥羽 梓
工藤 掉
山内桃児
大塚有希菜

極楽は還らぬ人多かりし
喧騒の中に新内芋月夜
夢に見し夫秋晴れの黄泉路行く
秋桜やしなやかに雨かわしたる
秋日和猫一の字に伸びており
つやつやの熊に生まれて竹の春
狼の眠りの中に吾亦紅
十月の四方に向きし蛇口かな
蟋蟀は昼も昨夜と同じ場所
キリン舎の扉は高し秋の暮

編集後記

冬の朝真白き月を西に見て

岱潤

早いもので今年も終わろうとしている。平成の四半世紀である二十五年という数字に、なじみず違和感を感じたまま、二十六年に入ろうとしている。そんなにたつたんだと思ってしまう。

今年もいろいろなことがあったが、暮れに來て一流ホテル・一流百貨店等のレストランや店頭における食品表示の偽装が次々に明らかになった。もはや偽りのない表示などないのではないかと思われるほど、あらゆる店舗で暴露された。中でも加工肉をステーキとして出していたのには驚かされた。

雑誌『浄土』
特別・維持・賛助会員の方々

飯田実雄(駒ヶ根・安楽寺)
巖谷勝正(目黒・祐天寺)
魚尾孝久(三島・順成寺)
大江田博導(仙台・西方寺)
加藤亮哉(五反田・専修寺)
熊谷靖彦(佐賀・本應寺)
桑原恒久(川越・蓮馨寺)
佐藤孝雄(鎌倉・高德院)
佐藤成順(品川・願行寺)
佐藤良純(小石川・光圓寺)
東海林良雲(塩釜・雲上寺)
須藤隆仙(函館・称名寺)
高口恭行(大阪・一心寺)
田中光成(町田・養運寺)
中島真成(青山・梅窓院)
中村康雅(清水・実相寺)
中村瑞貴(仙台・愚鈍院)
野上智徳(静岡・宝台院)
藤田得三(鴻巣・勝願寺)
堀田卓文(静岡・華陽院)
本多義敬(両国・回向院)
真野龍海(大本山・清浄華院)
臈博之(網代・教安寺)
水科善隆(長野・寛慶寺)
宮林昭彦(大本山・光明寺)
(敬称略・五十音順)

そしてお祝い事としているのが、二〇二〇年のオリンピックが東京に決まったニュースだ。東京にいるともはや日本中がお祝いモードになっているようだ。そしてとても怖いと感じたのは、このニュースに対して、「おめでとう、よかった」といえない人は、非国民のような空気が流れていることだ。被災地の復興や原発問題など、抱えている問題があまりに多いのにも関わらず、東京オリンピックに対して懸念を表明すると、とんでもない空気が流れるのは、戦前の歴史を学んだことを思い出させる。安倍内閣はオリンピック招致でさらに自信をつけ、国家完全保障会議や特定秘密保護法案など、戦

争への道を舞い進んでいるかのようにも見え、とても恐怖感を覚える。エネルギーの原料一つとっても日本は、近隣の国との貿易や協調がなければ、存在すらできない国なのに……。(長)

編集チーフ
編集スタッフ

長谷川岱潤
斎藤寛道
佐山哲郎
青木照憲
村田洋一

浄土

七十九巻十二月号 頒価六百円
年会費六千円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可

印刷 平成二十五年十一月二十日

発行 平成二十五年十一月一日

発行人 佐藤良純

編集人 大室了皓

印刷所 株式会社 シーティイー

〒一〇五・〇一一

東京都港区芝公園四・七 四明照会館内

発行所 法然上人鑽仰会

電話 〇三・五七八六九四七

FAX 〇三・五七八七〇二六

振替 〇一八〇・八・八二八七

ホームページ <http://jodo.ne.jp>

泰雲の

文と写真

美味探訪

アップルパイホール3900円
カット 500円 (いずれも税込み)



浄土真宗東京東本願寺派
光徳寺・平井泰雲尼
茶道歴30年

ピエス・モンテ

銀座・並木通り

華やかな装いの12月の銀座。特に並木通りのリンデン（シナノキ）の街路樹がイルミネーションで輝きはじめると、落ち着いた並木通りが華やき美しい街になります。

今回は、その並木通りの新橋よりの洋菓子店「ピエス・モンテ」名物アップルパイのご紹介です。

「ピエス・モンテ」の語源は、フランス語の「小さな断片を積み上げた」という言葉で、飾り菓子を意味するそうです。

かつて銀座6丁目の藤井画廊隣に「エルドール」という洋菓子の名店があり、ここのアップルパイとシュウクリームが大好きでしたが、突然お店がなくなりどう探しても見つけれずにいました。

その後、昭和58年、「エルドール」にいた方が同じレシピで並木通りに「ピエス・モンテ」を開店したことを知り、早速アップルパイを買い求めました。

美しい層になったパイ生地にあみずみずしいりんごが詰まって、塩味も強くなく、甘すぎず上品なアップルパイは、あの「エルドール」のアップルパイそのものでした。

アップルパイの焼き上がり時間は午後3時前後ですが、人気商品のため早くに売れ切れますので、予約がオススメです。

また、アップルパイだけでなく焼き菓子、ケーキも素晴らしく美味しいです。

東京都中央区銀座8-6-22 ピアースビル1F

営業時間 月～金 12時～24時（土12時～20時）

定休日 日曜日、祝祭日

電話 03-3574-0960

アクセス 地下鉄「新橋駅」下車3番出口から並木通り徒歩3分

新

刊

案

内

いまよみがえる関東巡礼の旅

関東十八檀林ガイドブック



江戸時代に浄土宗僧侶の養成を目的として選定、創建された十八の古刹や名刹がついに一冊の本になりました。単立寺院となった二か寺を含む関東各地の十八の寺院を取材、その歴史から今に伝わるエピソード、さらにお寺巡りや団体参拝に役立つ周辺の見所や食事処、加えて詳細なアクセスマップに各寺院の基本情報も掲載された手元に置いておきたい待望の一冊です。また、巻末には江戸時代に十八檀林参拝の様子を記した摂門の『檀林巡路記』の現代語訳抄も掲載されています。



《十八檀林》

東京	増上寺	傳通院	幡随院	靈巖寺	靈山寺	大善寺
千葉	大巖寺	東漸寺		群馬	善導寺	大光院
茨城	大念寺	常福寺	弘経寺(瓜連)	弘経寺(結城)		
埼玉	浄国寺	勝願寺	蓮馨寺		神奈川	光明寺

発行：関東十八檀林霊場会
A5版／カラー96頁
：800円（税込）

※本誌のお求めは、
法然上人讃仰会 電話03-3578-6947 Fax03-3578-7036
または各檀林寺院、浄土宗文化局でもお求めいただけます。